

松岡正剛著「新日本様式への挑戦 - 日本的価値観と新日本様式 - 」

角川学芸出版 2009年1月28日刊を読む

新日本様式への挑戦 - 日本的価値観と新日本様式 -

1. 「引用」「生けどり」「引き算と余白」

日本の方法の面白さには、いくつかの特徴があります。今日はそれを4つに整理して説明します。

(1) その一つが「寄物陳思^{きぶつちんし}」です。これは「モノに寄せて、思いを述べる」という意味ですが、基本的には「引用」という方法として日本では多様に用いられます。日本文化では「引用」はオリジナリティがないのではなく、積極的な方法になるわけです。韓国の引用、ヨーロッパの引用、あるいは九州の引用、玄界灘の引用というように、さまざまな引用をすることによって初めて感性的な情報が伝わる。思いが述べられるわけです。

(2) そこには、「生けどり」という考え方もあります。この「生けどり」が2つ目の特徴です。これは「生きる」という字が元なのですが、まさに「生活」という言葉の「生」と「活」、すなわち「ライフ」ということです。「生けどり」というものが日本人の生活なんです。これを言い換えれば「間接化」の方法ともいえます。

どういうことかという、日本文化といえは雪月花^{せつげつか}、花鳥風月^{かちょうふうげつ}と言われますが、日本人はこれをそのまま楽しむわけではないんです。これらを日本人は活けて楽しむ。雪を楽しみたければ雪山に行くのではなく、雪を盆に活けてそこに生けどって楽しむ。月は盆に水を張って、そこに映して楽しむ。さらには月と自分のあいだに^{しとみど} 部戸、^{びょうぶ} 屏風、^{かべしろ} 壁代、^{きちょう} 几帳、^{こうし} 格子といった調度を回し立てて、それらを通して月を生けどる。

ダイレクトにではなく、わざわざそういうものを通して雪月花を楽しむんですね。花も野山で楽しむのではなく、必ず枝を折って部屋の中に活ける。これが生け花の源流です。日本では特に、花が発達したわけですね。

このように、日本の様式というものは、(新日本様式かどうかは別として)、「間接化」して生けどったものを楽しむような生活様式が誕生しないかぎり、日本の様式とは呼べないわけですね。それが日本の「ライフ」であり「ライブ」なんです。

ロックコンサートの「ライブ」じゃないですが、最近ではニュース番組でも「これはライブです」とか「ビデオです」「リポートです」とか出ますけど、あの「ライブ」という感覚を、

生けどりの生活を間接化して楽しむという日本の独自のものにもう一度戻すべきですね。少なくとも日本様式ということを重視するのであれば、そうすべきです。

- (3) それから 3 つ目の特徴として「引き算と余白」ということがあります。その代表的なものがお茶の文化です。村田珠光むらたじゆこうに始まって武野紹鷗たけのじゆうおうを経て千利休せんりのきゆうに達した茶の湯というものは、徹底的に引き算をしたわけですね。小間を 4 畳半から 3 畳に、さらに 3 畳を 2 畳台目に縮めて、おまけに小さなじり口を作って、秀吉ひでよしであろうと大名であろうと茶室に入るときには大小の刀をはずして、その小さな入り口をくぐらなければならない。これはすべて引き算ですね。

有名な話ですが、利休が秀吉に「このところ朝顔が大変美しゅうございますので、どうぞ朝早いうちにお茶を召し上がっていただきたい」というお招きをして、秀吉が喜び勇んで利休を訪ねると、庭の朝顔の花がすべてちょん切られていた。秀吉が腹をたててにじり口から茶室に入ってくると、床の間に一輪だけ朝顔が活けてあって驚いたという有名な話がありますが、これも引き算ですね。

私は、日本が経済大国とか生活大国とか言っておごっていた時代、豊かなときこそもっと引き算をすべきだったと思います。余裕があるんですから引き算を試すべきだった。ところが今の製品を大雑把に見ている限り、引き算を意識したものはあるんですが、引いてなお凄い空間とかモノはまだまだ足りないですね。最近ではむしろジョン・ガリアーノとかマルタン・マンジェラのようなファッションデザイナーや韓国や中国のフォトグラファーやグラフィックデザイナーのほうが、引き算がうまいと思います。

日本の製品も決して過剰ではない。が、本当にストイックかということとそうでもない。慎ましい感じをなんとなく出して、控えめというものを自信をもってやっているという感じですね。これではたいしたことない。

だから 4 畳半まではできていても、3 畳台目や 2 畳台目まではいかない。志野の「卯の花塙」(国宝の茶碗)のようにまでいかない。楽茶碗のようにブラックホールのような深さをもったものは、とうてい出てこない。

電化製品なども、ああ綺麗だな、美しいな、よくやったな、というものは「プロジェクト X」のようにたくさんありますが、「世界にこんなものがあつたのか」と信長のぶながや秀吉が、あるいは宗達うなが唸るといふようなものは、皆無とはいわないまでも少ないと思います。そういう意味でこの「引き算」という方法をもう一度取り戻したほうがいい。

それから余白というのは「塗り残し」のことです。単にマージンを作るのではなくてわざわざ塗り残しを作る。例えば墨で絵を描くときに丸く塗り残すと月ができる。そういうのが

塗り残しです。これも今、少ないですね。例えば、今日の都市には塗り残した余白がまったくないでしょう。これはいけません。私はさっきから申しあげているように京都出身ですが、京都人にとって路地はとても大事なもので、近所の路地に育ったようなところがあるわけです。それはメイン通りや計画的に作られた道ではなくて、まるで塗り残されたようなところ
です。東京を歩いていますと、^{よつや}四谷や^{いちがや}市谷の奥や^{ふねわ}舟和あたりの横丁に、そういった塗り残したような町がちょっとはあってほっとしますけど、これがいったい産業社会の中でどうすれば作れるか。あるいは、様式やデザインとしてできるか。そこが問題になってきます。

2. 「小さきもの」 = 「わび」のころ

(1) それから、日本の様式には「小さきもの」という特徴もあります。これは引き算とか余白とは違って、「a little」という感覚です。要は「寸法」というときの「寸」「ちょっと」という感覚ですが、これが今日のマーケットはわかっていない。「粗末なものですが」とか「^{そしゆ}粗酒^{そこう}粗肴でございます」という日本人の感覚をどうやったら作れるかということです。最近の日本にはいろいろと不満はありますが、特にこれがうまくいっていないと思います。これは何かというと、言い換えれば「侘び」 = 「わび」というものです。

(2) そもそも「わび」というのは、「本当はもっと手をかけてもてなしをしたいのだけれども、貴方が突然お見えになったので十分な準備もできません。とりあえずのものですが、今日はこの茶碗でお召し上がりください」という感覚をこめて侘びることなんです。「花も本当はすばらしいものを用意したかったけれども、庭にはこんなものしか咲いておりませんでした、でも、うちが大切にしている桶に活けてみました」と侘びる気持ちが「わび」である。今の日本はこれができなくなっている。ついつい自慢してしまうんですね。グローバルばかりと比較してしまう。

侘びること、粗品化ということ、へりくだること。それが足りない。粗末なものなのに水引が一輪ぴつと結ばれたりすると何か忘れられないものになったり、捨てがたいものになるのにね。ところが何もかもいいものにしようとする、ガンガンやり続ける以外に方法がなくなってくる。これは大変ですよ。だからどこか「粗」というものを入れる、引くだけではない「侘ぶ」というものが重要です。

それを^{やなぎむねよし}柳宗悦(民藝運動の創始者)は、「粗相の美」と言いました。また江戸時代には「事足りぬ美」とも言いました。これは「満足の美」と対比しているわけですね。どうも日本は「満足」や「満ち足りる」ことばかりを追いすぎてきた。

(3) それから「小さきもの」ということですが、これは『枕草子』が最初にその価値を発見した。「縮みの文化」とも呼ばれているように、ものがちょっと小さめになることでよくなる、と

いう感覚です。

日本はこれまでもトランジスタとかいろいろ成功していますけれども、小さいサイズをもう一度考えていただきたい。いま開発されている製品や商品でいいですから、それをいったんちょっと小さくしてもらえませんか。そうすれば、何が一番のリアルサイズやリーガルサイズなのかが見えてくる。そういうアダプテーションということも非常に大事です。ちょっと小さめにすると、デザインも商品開発もネーミングも一気に新しくなる可能性があるんですね。トランジスタみたいにただ小さいものを作るということではなくて、普段あるもののサイズをちょっと小さくする。たいへん難しいことですが、これはぜひ考えたほうがいい。

3. 「ものまね」と「二項同体」

- (1) それからもうひとつ、「ものまね」ということについても加えておきます。ものまねは日本では「物学」と書きます。これが世阿弥ぜあみの書いた本当の「ものまね」という字です。ですから「ものまね」というのはコピーだ猿真似だと受け取られることもあるんですが、本来は「物をよく見て学ぶ」ということです。日本的なコンセプトで言うと「写し」と言います。これも、ぜひ今一番大事にしてほしい方法です。

いいものを作りたかったら本当に写してみることです。俵屋宗達を写してみる、長谷川等伯はせがわとうはくを写してみる、源氏を写してみる、あるいは「三十六人歌集」を、藤原定家ふじわらのさだいえを写してみるべきです。

というわけで、新日本様式のたねになるものかどうかわかりませんが、いくつかのポイントをお話しました。

ところで、日本にはほかにもうまくいっているな、と思えるものがあります。例えば、日本人はナビがうまいですね。これは元からうまい。また、ゲームがうまいですね。

もともと日本のゲームの基本は「あわせ」「きそい」「そろい」なんですね。最初から競わずに合わせるところから始める。そして勝ち負けを忘れて揃える。ヨーロッパのゲームは競うところから始める。それはそれなりに楽しいですし、勝ち負けもはっきりする。ところが日本は、歌合せせんざい、前裁合わせ、具合合わせというように、ありとあらゆるものの違いを合わせて、それから競いあってそれを揃えるんです。こういうゲーム感覚は任天堂やプレイステーションにいたるまで、やはり日本はうまいですね。こういうものも私は非常に日本的だと思います。

ナビも、歌枕うたまくらとか双六すごろくとかカルタなんかもそうですが、日本人はゲームの中にナビをいれ

るんですね。特に双六なんかはナビ感覚にあふれたゲームです。

それから日本は番付にするのがうまいです。酒豪番付から遊女の番付から、星の番付から鰻^{うなぎ}の番付まで、日本人は常にベスト 50 くらいを選んで、それを「あわせ」「きそい」「そろい」にしてきました。しかもそれを東と西に分けて、どちらが強いかわからないような並べ方にして、張出し横綱なんていうものも作り出して、いったいそれが大関より強いのかどうか判らないようにした。しかしこうやって東西番付を作るというあたりが、日本のナビのうまさなんですね。価値づけの方法がうまい。

- (2) 今年(2006年)9月に出る私の本『日本という方法』(NHK ブックス)の最後に、「二項同体」ということを書きました。日本人は、A と B を対比することに慣れていないんです。ヨーロッパでは、A と B を対比して C に弁証法的に止揚する。それはそれで、たいへんかっこいい方法です。

しかし地方、日本は A も B も残したまま同体にし、C という新しいものを見立ててしまうんです。ラジオとカセットをラジカセという新しいものに見立てるのです。そういう二項同体という日本の方法があるというのがこの本の結論になっています。これは、西田幾多郎^{にしだきたろう}という哲学者が「絶対矛盾的自己同一」ということを言い出し、「それを恐れなくていい野が日本です」と言ったことにも繋がる話です。そのあり方の一つが先ほどの東西番付のようにものです。ぜひそんなこともヒントにしてください。

P103 ~ 111

[コメント]

日本人のアイデンティティ、日本のナショナルアイデンティティを十分学び、十分生かした上で、独自の製品やサービス、更には経営手法を目指すのが「新日本様式」の運動だと私は考える。何をどうしたらよいかわからない、ものやサービスが売れないで困り果てているなら、思い切って日本人や日本の原点にまで返ってゼロから考え直したらどうか。世界に打って出るならなおのこと自らを見直し続けることだ。

- 2010年6月17日 林明夫記 -